

文化大革命期（1966-76年）における 新しい少数民族エリートの登場*

熊倉潤

（日本貿易振興機構〈ジェトロ〉アジア経済研究所研究員）

【要約】

文化大革命（1966-76年）の始まりから50年以上が経過した。従来の研究は概して、文革期を民族工作全般が「破壊」された時期であったと見なしているが、本稿の事例分析が明らかにしているように、中国共産党（以下「中共」）の党組織再建に際し、少数民族自治区の上層部に新しい少数民族エリートが出現した面もある。その背景には、1969年の中共第九回党大会以降に唱えられた「吐故納新」の政策理念により、新しい政治エリートが上層部に登用されていたことが関係している。文革期に登場した中共体制に親和的な新しい少数民族エリートは、文革後長期にわたり上層部に定着することになる。（なお、「エリート」の定義は少数民族自治区党委員会常務委員クラス以上の人とする）。

キーワード：文化大革命、少数民族エリート、内モンゴル、新疆、毛沢東

* 本稿は平成28年度日本学術振興会海外特別研究員（台湾・国立政治大学東亜研究所客座助理研究員）としての研究成果の一部である。

一 はじめに

文化大革命（以下「文革」とする）の始まりから、既に50年以上が経過した¹。この半世紀の間に、文革に関する研究は飛躍的に進展し、文革と少数民族政策の関係に関する研究も、既に一定の蓄積を見るに至ったが、過去の研究は、概して文革期を民族工作全般が中断された、あるいは「破壊」された時期であったと捉えている。中華人民共和国（以下「中国」とする）では、金炳鎬が、文革の約10年間は、「社会主義民族関係が空前の大破壊を受け」、「民族工作が全面的な破壊を受けた時期」²であったと総括している。もっとも、1993年に中国で出版された『当代中国的民族工作』は、文革期の民族工作が「破壊」を受けながらも、「破壊」に対する抵抗の動きもあり、「一部の民族自治地方の経済建設にも一定の発展が見られた」³と指摘する書きぶりとなっていた。とはいえ、同書も民族工作の「取消」、あるいは「民族団結」の「破壊」の面を論じる点では変わらない⁴。

従来日本の研究も、民族政策の「破壊」の面に力点を置く傾向があった。毛里和子は、「文革期には、民族自治区域への一定の優遇や民族幹部の養成、きめの細かい言語文化政策などは行われなくなり、民族工作そのものがなくなったといってもいいすぎではない」⁵としている。また国分良成と星野昌裕は、1971年以降に見られた少数民族政策の調整の存在を指摘しているが、この調整も実際にはほ

¹ 文革の時期は、1966年から1976年までとする。

² 金炳鎬『新中国民族政策60年』（北京：中央民族大学出版社、2009年）、頁19。

³ 黄光學編『當代中国的民族工作』（北京：當代中国出版社、1993年）、頁146。

⁴ 同上、頁146～158。

⁵ 毛里和子『周縁からの中国——民族問題と国家』（東京大学出版会、1998年）、106ページ。

とんど機能せず、「民族理論と民族政策に関する問題の決着は、結局のところ文化大革命における急進派が一掃されるのを待たなければならなかったのである」⁶と指摘している。また、最近の研究の一例として、楊海英の仕事が挙げられる。楊は、文革期の内モンゴル地域で生じた暴力の実例を詳細にまとめており、「破壊」の面に関する文革研究に裨益するところ大であろう⁷。

このように文革と少数民族政策の関連に関する研究には、中国においても、日本においても、共に「破壊」の面に関心が集中する傾向があった。もちろん、中国と日本では異なる点もあり、日本における研究は文革の負の面を一層暴露してきたという意味で、重要な価値を有している。しかし、これまで知られてこなかった「破壊」の事例を一層深く分析したことをもって、「真実」に到達したと考えるのであれば、それは安易ではないだろうか。なぜならば、「破壊」の他にも別の一面があり、「破壊」とは異なる動きが今日の少数民族問題に影を落としている点をも視野に含めなければ、文革及び今日の少数民族問題に対する理解がやや一面的になりかねないからである⁸。

⁶ 国分良成・星野昌裕「中国共産党の民族政策」可児弘明他編『民族で読む中国』(朝日選書、1998年)、436ページ。

⁷ たとえば、楊海英『墓標なき草原』(岩波書店、2009年)。楊氏の研究には、1970年代についての記述が比較的少ないが、それは彼の問題関心からして自然なこととも思われ、筆者はその点を批判するものではない。こうした優れた研究の後を受けて、本稿が補うところがあれば幸いである。

⁸ この段落に述べた問題意識を形成するにあたり、塩川伸明氏の「二層認識から四層認識へ」という提言を参考とした。要約すると以下のようになる。当局の公式宣伝(第一層)を鵜呑みにしないことは勿論だが、その虚構を暴いたこと(第二層)をもって真実に到達したと考えることは安易である。公式宣伝は嘘であるけれども実は案外「まし」な面があったという「第三層」を経由して、「まし」な面までもが複雑な逆説的連関を通して否定的な結果を招いたという「第四層」に到達することが

この別の一面とは、具体的には、前述の国分良成と星野昌裕も指摘していた、1971年以降に見られた少数民族政策の調整が挙げられるが、しかしそれだけでなく、その前段階にあたる1969年の第九回党大会における人事も含めて考察する必要があるだろう。第九回党大会以降の時期の中共は、特に幹部の任用の面で、無名の少数民族幹部を中央候補委員、中央委員等に選出し、その後少数民族地域に再建された党組織に少数民族幹部を扶植するという、興味深い展開もを見せていた。それにもかかわらず、1970年代の台湾における先駆的な研究を除いて、この問題が本格的に検討された形跡はなく、改めて考察する必要がある。

少数民族エリートの問題を考える上で、避けて通れない問題が、内モンゴル自治区党委員会第一書記ウランフ（烏蘭夫）の失脚に伴い、モンゴル族エリートが被った迫害である⁹。もっとも、この有名な出来事が文革期の特徴として他の地域にも当てはまると言えるか否かは、微妙な問題である。確かに、文革期に内モンゴルのモンゴル族エリートだけでなく、楊静仁（回族）、ブルハン・シャヒディ（包

重要であろう（塩川伸明『ソ連とは何だったか』（勁草書房、1994年）、3～7ページ）。私見では、文革期の民族政策の研究は、塩川伸明氏のいう「第二層」に関心が比較的集中し、「第三層」と「第四層」が十分に議論されていない傾向があると思われる。従来、「第二層」に研究が集中した背景には、文革期の知られざる「破壊」、惨劇等の実例を暴露するところに当面の研究目的があると考えられたからであろう。そうした「第二層」の研究は、その意味では価値があったが、しかし文革という運動の全体を俯瞰するものではありえないだろう。たしかに「第二層」を指摘することは、研究の発展段階の一過程において一定の意義があることは言うまでもないが、「第二層」が既にある程度知られたのであれば、更に掘り下げることも重要であり、「第三層」を検討した上で、より深刻な問題である「第四層」の深淵を覗き込む作業を進めたい。

⁹ この問題に関しては、楊海英氏の一連の研究を参照されたい。同氏の代表的著作として、楊海英、前掲書。

爾漢・沙希迪)(ウイグル族)ら著名な少数民族エリートが各地で失脚しており、文革期に少数民族エリートが多数打倒されたという意味では、一定の普遍性がある。しかし、建国以来枢要な地位にあった旧来の少数民族エリートが全て打倒されたかと言えばそうではない。文革前に新疆ウイグル自治区党委第二書記であったセイフディン・エズィズィ(賽福鼎・艾則孜)(ウイグル族)¹⁰、広西チワン族自治区党委第一書記であった韋国清(チワン族)は、文革期にその地位を追われるどころか、その地位を維持している。更に言えば、セイフディンに関しては、新疆ウイグル自治区党委第一書記に昇任し、韋国清は広東省党委第一書記に栄転している¹¹。この点をどう解釈するかが重要であるが、本稿の着目したい新しい少数民族エリートの登場の面とは異なり、言うなれば旧来の少数民族エリートの「破壊」の面に対する一層踏み込んだ分析であり、論文を分けて検討する必要のある別個の課題である。

そこで本稿では、文革期における新しい少数民族エリートの登場について、具体的には少数民族エリートの起用と抜擢に関する事実解明に焦点を絞ることとする。そのため、本稿はファクト・ファインディングの論文となるが、文革期に抜擢された少数民族エリートはその後も少数民族自治区ないし中央政府の上層部に存在し、今日

¹⁰ セイフディンは「サイフジン」とも言われるが(たとえば、天児慧他編『岩波現代中国事典』(岩波書店、1999)、399ページ)、本稿ではウイグル語の発音により近い「セイフディン」とする。

¹¹ セイフディンの昇進の問題については、さしあたり筆者の未公開博士論文の第六章「文化大革命期の自治区政治エリート集団(1966-1976)」(熊倉潤「民族自決と民族団結——少数民族地域における政治エリート集団の形成過程に関する中ソ比較研究」東京大学大学院法学政治学研究科博士論文(2015年)、194~233ページ)を参照されたい。韋国清の栄転については、以下参照。宋永毅『文革機密檔案：廣西報告』(美國紐約市：明鏡出版社、2014年)。

の民族問題にも影を落としていると言っても過言ではない。また文革期の少数民族エリートの形成変容過程は、過去の文革研究が看過してきた点であり、今後考察を行うべき問題である。本稿では、文革期に新しい少数民族エリートが登場したことの分析を通じて、中国の少数民族問題における「人」の遺産、換言すれば文革の遺産が形成される過程を考察する。

二 1970年代の台湾における研究

「はじめに」で述べたように、1970年代の中共の少数民族幹部任用について、当時からその重要性を意識し、これを研究していたのが台湾の研究者である。研究内容は、主に雑誌『中共研究』に発表された論文から窺い知ることができる。本節では、同雑誌に掲載された論文を中心に、1970年代の台湾における研究を紹介したい。

1972年3月に出版された『中共研究』第6巻第3期の趙洪慈の論文「1年来の中共の『少数民族』工作」は、1971年の中共の少数民族工作の政治面における要点として、「柔軟な路線をとり、少数民族地方幹部を養成、起用した」ことを指摘した¹²。管見の限り、この趙論文が、中共が少数民族幹部起用を再開したことに言及した最初期のものである。それ以前にも、「少数民族工作」を論ずる論文は存在したが、少数民族幹部の養成、起用については言及されていなかった¹³。それに対し、この趙論文は、新華社の報道等に拠りながら、各地で少数民族幹部の養成が推進された点を明確に指摘している。た

¹² 趙洪慈「一年來中共的『少数民族』工作」『中共研究』第6巻第3期（1972年3月）、頁48。

¹³ たとえば、陳壯彭「一年來中共的『少数民族』工作」『中共研究』第5巻第2期（1971年2月）、頁89～104。陳壯彭「一年來中共的『少数民族』工作」『中共研究』第4巻第1期（1970年1月）、頁88～100。

たとえば、1971年10月31日の新華社報道に基づき、広西チワン族自治区都安瑤族自治県において少数民族幹部が同県各級幹部の80%を占めるに至った事例等が紹介されている¹⁴。

その後、少数民族幹部政策の変化を取り上げる論文が増加し、分析の度合いが深まるとともに、紹介される事例も増加した。1972年6月に発表された論文「中共の少数民族幹部の養成と利用」は、1949年以前に遡り、中共が少数民族幹部を養成、利用してきた歴史的経緯を説明した上で、文革の開始に伴い、「少数民族出身の幹部が非常に不足する現象」が生じた結果、1971年に中共が少数民族幹部の積極養成を再度強調するようになり、具体的には中央民族学院及び地方の民族学院が学生の募集を再開する等の変化が生じたことを論じた¹⁵。続いて翌1973年1月に発表された論文「1972年の中共少数民族工作」は、報道に基づき、各地の基層幹部に占める少数民族比率の向上が報じられたことを紹介している。ここで示されている地域は、チベット自治区、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区、広西チワン族自治区、青海省、雲南省、貴州省、四川省、広東省、湖南省にまたがる、合計19の自治州、地区、自治県(旗)であり、紹介される事例数が増加した¹⁶。加えて、少数民族幹部の登用が重視された背景を論じるにあたり、漢族側の問題として、「辺境」に移住した漢族には、「反革命分子」、土地を失った農民、

¹⁴ 趙洪慈「一年來中共的『少數民族』工作」『中共研究』第6卷第3期(1972年3月)、頁61。この事例については、『廣西日報』の記事によっても確認できる(『廣西日報』〈南寧〉1971年11月3日、第2版)。

¹⁵ 國相「中共對少數民族幹部的培養與利用」『中共研究』第6卷第6期(1972年6月)、頁77～85。

¹⁶ 趙洪慈「一九七二年的中共少數民族工作」『中共研究』第7卷第1期(1973年1月)、頁70～71。

大陸各地の知識青年、「問題のある学生」、「問題のある労働者」、整理され解雇された下級党幹部が多く、新しい幹部として党が期待するような人材が漢族の中にいなかった点を指摘している¹⁷。

少数民族幹部任用の必要性を中共側がいかに関心しているかについて、台湾の研究は当時、雑誌『紅旗』の文章等の公開情報を頼りに分析していたようである。翌1974年の『中共研究』に上、中、下巻に分けて連載された趙洪慈の論文「中共少数民族幹部政策研究」は、この時期発表された中共の少数民族幹部政策の変遷に関する論文の中で最大規模のものである。この論文の中で、趙洪慈は、当時最新の情報であったと思われる『紅旗』73年3月に掲載された文章「積極培養少数民族幹部」を引用し、少数民族幹部の大量登用の背景を説明している¹⁸。『紅旗』73年3月の文章「積極培養少数民族幹部」は、少数民族幹部の長所について、

「彼らはその土地で生まれ育ち、辺境民族地区の歴史と現状を了解し、その民族の大衆と密接に連携し、その民族の生活習慣に知悉し、その時その場所の情況に合わせて、その民族の言語を用いて、大衆に宣伝し、大衆を組織し、党の路線と方針政策を大衆の中で貫徹させることが十分にできる¹⁹」

と指摘し、少数民族幹部の積極的な養成を主張していた。この時期の中共が少数民族幹部を高く評価していた点を、当時の台湾の研究者は見逃さなかったのである。

¹⁷ 同上、頁69。

¹⁸ たとえば、趙洪慈「中共少数民族幹部政策研究(上)」『中共研究』第8巻第9期(1974年9月)、頁50。

¹⁹ 中國共產黨麗江地區委員會「積極培養少数民族幹部」『紅旗』(1973年3月)、頁17。

論文「中共少数民族幹部政策研究」において、趙洪慈は、それ以前の論文より更に具体的かつ網羅的に各地の幹部の民族構成を分析し、中共が第九回党大会以来、少数民族の「新幹部」(ここでは文革開始後に新たに幹部職に登用された者を指している)の養成、また少数民族の「老幹部」(ここでは文革以前から幹部職に就いていた者を指している)の再任用を進めていると考察している²⁰。当時既にここまで解明されていたことは特筆に値する。もっとも、重点は基層幹部の増加にあるとして、本稿の言う少数民族自治区上層部の少数民族エリートに目を向けていないきらいがある²¹。これは当時、台湾の研究が依拠していた資料が、主として基層幹部における少数民族比率の向上に関する各種報道であったため、資料の制約からして致し方ない事であろう。

この種の研究は、1970年代後半に入ると徐々に行われなくなったようである。一般に、1970年代の台湾の中共研究は、反共イデオロギーの色彩が強く、中には結論ありきの主観論のように見られるものも存在するが、少なくとも文革中における少数民族工作の存在を肯定している点では、ある程度客観的かつ有意義な議論も行われていた²²。もっとも、当然ながら限界もあり、先に指摘したように、県レベル以下の基層幹部に研究が集中する傾向があったことは否めな

²⁰ 趙洪慈「中共少数民族幹部政策研究(中)」『中共研究』第8巻第10期(1974年10月)、頁94~97。趙洪慈「中共少数民族幹部政策研究(下)」『中共研究』第8巻第11期(1974年11月)、頁81~84。なお、趙洪慈はこの2年後、研究成果をとりまとめた著書を出版しているが、そこでも基本的に同じ結論が述べられている。趙洪慈『中共政權少数民族政策』(台北:中國文化學院大陸問題研究所、1976年)、頁317。

²¹ たとえば、趙洪慈「中共少数民族幹部政策研究(中)」、頁97。

²² たとえば、以下の論文は、結論はともかくとして、内容については見るべきものがある。楊文欽「一九七四年的中共少数民族工作」『中共研究』第9巻第1期(1975年1月)、頁96~103。

い。基層幹部の登用に関しては、それなりに報道があったため、論じることが可能であったが、少数民族自治区上層部に存在する高級幹部、本稿の言う少数民族エリートに関しては、情報源が乏しかったと考えられ、十分に研究されないまま後世に残された。

三 文革期の少数民族エリートの起用とその目的

前章で述べた1970年代の台湾における研究の限界、すなわち少数民族自治区上層部における少数民族エリートの任用の問題を解明する上で、重要な資料が1990年代に発行された中国各地の党組織に関する『組織史資料』と呼ばれる資料である。『組織史資料』は、省だけでなく、少数民族自治区においても各自治区の『組織史資料』が編纂されており、この時期の地方上層部の人事を考察する上で最も基本的かつ詳細な資料である。また、1990年代以降人名事典等が出版され、最近では台湾でホームページ「中共政治菁英資料庫」が作成され、政治エリート研究を行う環境が整ってきている。文革研究全般における最近の進歩は言うまでもない。そこで本章では、比較的最近の文献、資料等に基づき、各自治区上層部及び党中央委員会の人事を考察したい。なお、ここでは「少数民族幹部」とは別に「少数民族エリート」という表現を用いるが、その定義を「党組織において省級（すなわち少数民族自治区）の党委員会常務委員以上の役職に就いている現地出身の少数民族幹部」としたい。このように定義することで、既に前章において紹介した1970年代の台湾の研究が比較的多く扱ってきた基層幹部としての少数民族幹部と区別することができるだろう。

1 第九回党大会における人事

文革期において、新しい少数民族エリートの登用を促した政策理

念は、毛沢東の「吐故納新」の「最高指示」に遡ることができる。「吐故納新」とは、古いものを吐き出して新しいものを吸収するという意味であり、日本語の「新陳代謝」に意味合いが近い。1968年10月に発出された「最高指示」において、

「人間には動脈、静脈があって、心臓を通じて血液循環を行い、さらに肺を通じて呼吸をし、炭素ガスを吐き出し、新鮮な酸素を吸いこむ、これがつまり、古いものを吐き出し、新しいものを取り入れること(原文は『吐故納新』)である。プロレタリア階級の党も古いものを吐き出し、新しいものを取り入れてはじめて、生氣はつらつとしたものになる。廃物を取り除かず、新鮮な血液を吸収しなければ、党は生氣を失ってしまう²³」

と謳われた。「吐故納新」の政策理念は、上述の「最高指示」と同じく1968年10月に発行された『紅旗』社論「吸収無産階級的新鮮血液」²⁴及び1969年の第九回党大会における林彪の報告の中で強調された。このとき林彪報告は、上述の最高指示を引用した上で以下のようにまとめている。

「毛主席はこの生きいきとした比喩を用いて、党内矛盾の弁証法を言い表したのである。『事物の矛盾の法則、すなわち対立面の統一の法則は、唯物弁証法の最も根本的な法則である。』党内の二

²³ 「最高指示」『紅旗』(北京)、1968年第4期(1968年10月)、頁2。日本語訳を作成するにあたり、以下を参考にした。東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第一巻(東方書店、1970年)、32ページ。

²⁴ 「吸収無産階級的新鮮血液——整黨工作中的一个重要問題」『紅旗』(北京)、1968年第4期(1968年10月)、頁7・12。

つの路線の対立と闘争は、社会の階級矛盾および新しい事物と古い事物との矛盾が、党内に反映したものである。もし、党内に矛盾と、矛盾を解決するための闘争がなければ、また、古いものを吐き出し、新しいもの取り入れなければ、党の生命も止まってしまふ。毛主席の党内矛盾についての理論は、今後党を整頓し、党を建設していく上での根本的な指導思想である²⁵」

こうして「吐故納新」の政策理念は党建設の「根本的な指導思想」とされた。もっとも、本論文の主題である少数民族エリートに関して言えば、「吐故納新」の指示は、当然ながら漢族を中心とするプロレタリア階級全体を対象にしたものであり、少数民族の任用を特別に示したのではない。しかし、第九回党大会の時期に、「吐故納新」と併せて強調された、以下の文言は、「新鮮な血液」として吸収された「新幹部」の内部に少数民族を含む必要性を人々に認識させるものであった。

「国家の統一、人民の団結および国内各民族の団結は、われわれの事業が必ず勝利するための基本的保障である²⁶」

これは元来、1957年6月に『人民日報』上に発表された毛沢東の講演「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」の中に見られた文言であり、第九回党大会の林彪報告において引用された。こ

²⁵ 林彪「在中国共产党第九次全国代表大会上的报告」『红旗』（北京）、1969年第5期（1969年5月）、頁24。日本語訳を作成するにあたり、以下を参考にした。東方書店出版部編、前掲書、32ページ。

²⁶ 林彪、前掲書、頁33。日本語訳は以下に基づく。内閣調査室編『中共人民内部の矛盾と整風運動』（大蔵省印刷局、1957年）、276ページ。

ここで単に「人民の団結」だけではなく、「国内各民族の団結」と明示された文言が引用されたことにより、少数民族を積極的に幹部として登用する意味、換言すれば上層部に少数民族エリートを登用することの意義が、文革初期の混乱を経て再確認されたと言えよう。

これらの指示の下、第九回党大会の人事に、それまで無名であった新たな少数民族エリートが登場するようになった。その一例として中央委員に選出されたパオレジタイ(宝日勒岱)(モンゴル族)が挙げられる²⁷。パオレジタイは女性で、1938年生まれとされ、当時弱冠30代前半であった。文革開始直後の彼女は内モンゴル自治区の一介の人民公社党委副書記に過ぎなかったが、緑化事業の功績を高く評価され、第九回党大会で中央委員に選出され、基層幹部から異例の出世を遂げた²⁸。1971年5月に内モンゴル自治区革命委員会副主任(複数の副主任の一人)、1975年2月に内モンゴル自治区党委員会書記(複数の書記の一人)に就任し、文革後も1982年まで書記の地位を維持し、その後は内モンゴル自治区政治協商会議常務委員となった²⁹。その間、第十期、十一期中央委員に連続して選出された。

その下のランクの中央候補委員には、チリンワンダン(七林旺丹)(チベット族)³⁰、ルジ・トルディ(肉孜・吐爾迪)(ウイグル族)³¹、

²⁷ このとき選出されたその他の少数民族中央委員として、毛沢東、周恩来の信任が厚く失脚を免れた章国清、セイフディンらが出た。彼らがなぜ失脚を免れたのかについては、「はじめに」で述べたように、論文を分けて検討を要する問題であり、別稿を期したい。

²⁸ 略歴に関して、蕭淮蘇編『歴屆中共中央委員人名詞典 1921-1987』(北京: 中共党史出版社、1992年)、頁261。「中共政治菁英資料庫 寶日勒岱」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141313>。

²⁹ 中國共產黨內蒙古自治區組織部他編『中國共產黨內蒙古自治區自治區組織史資料』(呼和浩特: 內蒙古人民出版社、1995年)、頁243・302・539。

³⁰ 略歴に関して、蕭淮蘇編、前掲書、頁3。「中共政治菁英資料庫 七林旺丹」國立政治

ヤンツォン（央宗）（チベット族）³²らがあり、いずれもこのとき中央候補委員に初めて選出された人物である。チリンワンダン（1931年生まれ）は、1950年代末のチベット反乱において功を立て、「全国民兵英雄」と評されたことのある雲南省のチベット族で、文革中に迪慶チベット族自治州革命委員会副主任、雲南省革命委員会委員となり、文革後も長く雲南省政協副主席、迪慶チベット族自治州政協副主席等の地位にあった。ルジ・トルディ（1921年生まれ）は、文革前にトゥルファン県の人民公社の社長、同県党委委員であった。ヤンツォン（1943年生まれ）は、チベット自治区加查県の人民公社の副社長であった。ヤンツォンの特徴的な点は、女性であり、当時20代後半であったと見られ、若い女性基層幹部の登用という点ではパオレジタイの人事と共通する。省級の革命委員会委員であったチリンワンダンと別とすると、パオレジタイ、ルジ・トルディ、ヤンツォンに共通する特徴は、基層幹部から中央候補委員に選出された点である。また、チリンワンダンに関しても、年齢が比較的若く、「新鮮な血液」と呼ばれる条件を備えていたと言えよう。

こうして上層部に組み込まれた新しい少数民族エリートは、第九回党大会後の「団結」、特に少数民族に関して言えば、「最高指示」の「国内各民族の団結」を保障する上で、重要な存在であった。雑誌『紅旗』に掲載された文章からは、中共が彼ら・彼女らの名で発表した言説を通して宣伝していた内容が見て取れる。たとえば『紅旗』1969年6、7期には、「内蒙古烏審召公社革委会主任」の肩書き

大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141340>。

³¹ 略歴に関して、蕭淮蘇編、前掲書、頁72。「中共政治菁英資料庫 肉孜・吐爾迪」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1143497>。

³² 略歴に関して、蕭淮蘇編、前掲書、頁65。「中共政治菁英資料庫 央宗」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141586>。

のパオレジタイの文章が掲載されている。そこでパオレジタイは、第九回党大会の林彪報告でも引用された「国家の統一、人民の団結および国内各民族の団結は、われわれの事業が必ず勝利するための基本的保障である」に言及し、「革命団結」の重要性を深く理解していると述べ、「全国各族人民」と団結する決意を表明している³³。

『紅旗』に文章を発表したのはパオレジタイだけではない。チリンワンタンもまた、1960年に自身が就任した「雲南中甸県新聯大隊党支部書記」の肩書きで文章を発表している。文章は60年代の生産建設と文革の成果を称揚し、当地の旧「農奴」が「毛主席」に感謝している点を強調している³⁴。またルジ・トルディも、「ウイグル族貧農」の肩書きで発表した文章の中で、国内外の敵が百計を巡らして新疆の「民族関係」を挑発しているという現状認識を示した上で、「各族人民の革命大団結」を重んじ、「祖国の統一」を守る決意を表している³⁵。更にヤンツォンも、『紅旗』1969年10期に「西藏加查県先鋒公社革委会主任」の肩書きで発表した文章の中で、かつての「農奴」の困苦を自分の子供時代のエピソードを交えて暗く描き、「民族団結」の破壊を企図する「一握りの反革命分子」を批判している³⁶。中共は新たに抜擢した若い無名の少数民族に、基層幹部ない

³³ 寶日勒岱「把千里草原建設成祖國的鋼鐵長城」『紅旗』(北京)、1970年第5期(1970年5月)、頁74~76。

³⁴ 七林旺丹「毛主席的光輝千秋萬代照雪山」『紅旗』(北京)、1970年第1期(1970年1月)、頁37~39。

³⁵ 肉孜吐爾迪・孜牙「加強団結，粉碎帝、修、反的陰謀」『紅旗』(北京)、1969年第6・7期(1969年7月)、頁15~17。なお、同文章は、ズヤ(孜牙)という人物(肩書きは「カザフ族貧苦牧民」との連名で出されている。このズヤは、新疆ウイグル自治区革命委員会委員のズヤ(孜牙)(カザフ族)と考えられる。

³⁶ 央宗「毛沢東思想的光輝照亮了西藏高原」『紅旗』(北京)、1969年第10期(1969年9月)、頁69~72。

し「貧農」等の肩書きでこうした内容の文章を『紅旗』に発表させることで、「民族団結」と「祖国統一」が、漢族だけでなく少数民族、そして少数民族の女性、「貧農」を含む「各族人民」の総意として存在するという理解を宣伝していた。

2 党委員会再建における人事

1970年から1971年にかけて、全国的に整党建党工作、すなわち党委員会再建が進行した。少数民族地区においては、主に1971年に入ってから各級党委員会が陸続と成立し、それに伴い新しい党委員会委員が選出されることになる。その過程で、新しい少数民族エリートの登用も継続され、少数民族エリートが各級党委員会指導部に扶植されることとなった。

このとき旧来の少数民族エリートの中で、文革初期の混乱を生き延びた政治エリートが、党委員会委員ないし書記に選出されていた点も重要である。たとえば、チベット自治区においては、1971年8月のチベット自治区党委員会第一回代表大会後、天宝、楊東生（いずれもチベット族）がチベット自治区党委常務委員に³⁷、寧夏回族自治区においては、1971年8月の寧夏回族自治区党委員会再建時に、王志強が寧夏回族自治区党委員会副書記（複数人の一人）に³⁸、内モンゴル自治区においては、1971年5月に内モンゴル自治区党委員会再建された際、吳濤（モンゴル族）が内モンゴル自治区党委員会書記（複数人の一人）に³⁹、広西チワン族自治区においては、1971

³⁷ 中國共產黨西藏自治區組織部他編『中國共產黨西藏自治區組織史資料』（拉薩：西藏人民出版社、1993年）、頁154。

³⁸ 中國共產黨寧夏回族自治区組織部他編『中國共產黨寧夏回族自治区組織史資料』（銀川：寧夏人民出版社、1992年）、頁180。

³⁹ 吳濤は文革前に内モンゴル自治区党委員会常務委員を務めた人物であり、67年11月

年2月に広西チワン族自治区党委員会の再発足時に、第一書記の章国清と並んで覃應機(チワン族)が常務委員に就任した⁴⁰。

新疆ウイグル自治区では、1971年5月の新疆ウイグル自治区第二期党委員会発足時に、セイフディン、サウダノフ(曹達諾夫)(ウイグル族)が常務委員に選出され、林彪事件後、「林彪派」の第一書記竜書金が失脚すると、セイフディンが新疆ウイグル自治区党委員会第一書記代理に任命され(72年7月)、第一書記に正式に就任した(73年6月)⁴¹。人事の背後には、私見では、セイフディンに対する毛沢東の強い信頼があった⁴²。セイフディンの第一書記就任に前後して、新疆ウイグル自治区政府のお膝元であるウルムチ市では、市党委員会副書記、市革命委員会副主任のハムドン・ニヤズ(阿木冬・尼牙孜)(ウイグル族)が、市党委員会書記、市革命委員会主任に昇進した⁴³。ハムドン・ニヤズは、文革後、1985年に新疆ウイグル自治区人民代表大会常務委員会主任に就任した⁴⁴。類似の例として、

の自治区革命委員会成立以来、革命委員会副主任の地位にあった。中國共產黨內蒙古自治區組織部他編、前掲書、頁243・537～539。

⁴⁰ 中國共產黨廣西壯族自治區組織部他編『中國共產黨廣西壯族自治區組織史資料』(南寧:廣西人民出版社、1995年)、頁521～522。

⁴¹ 前年に復権した漢族の軍人・古参黨員で、王震と同郷人の楊勇が同第二書記に入り、曹思明が同第三書記に就くことが併せて決定された(中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁240)。

⁴² 文革開始後、中国全土で主立った政治エリートが多数失脚する中で、なぜセイフディンが生き残ることができ、逆に昇進したのかについては、別途検討を要するテーマであり、本稿では論じ得ない。この問題については、手前味噌であるが、さしあたり筆者の未公開博士論文の第六章「文化大革命期の自治区政治エリート集団(1966-1976)」(熊倉潤、前掲論文、194～233ページ)を参照されたい。

⁴³ 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁313・716。略歴に関しては「中共政治菁英資料庫 阿木冬・尼牙孜」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1144683>。張聲作編『當代中國少數民族名人録』(北京:華文出版社、1992年)、頁192。

⁴⁴ 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁743。

1973年8月に、当時新設された新疆ウイグル自治区革命委員会農林牧辦公室主任に就任したティムール・ダワメティ（鉄木爾・達瓦買提）の事例も指摘できる⁴⁵。彼は文革前の1964年に新疆ウイグル自治区人民委員会副主席に就任していたが⁴⁶、彼も打倒されることなく文革期を生き延び、出世した。文革後の1979年には新疆ウイグル自治区人民代表大會常務委員会主任、1985年には新疆ウイグル自治区人民政府主席の座を射止めることとなる⁴⁷。

こうした旧来の少数民族エリートが再建された党委員会において一定の勢力を持ったのに対し、新しい少数民族エリートが再建された各少数民族自治区の党委員会常務委員会に配置される例も、全国的に見られた。たとえば、チベット自治区においては、1971年8月のチベット自治区党委員会第一回代表大會後、パサン（巴桑）（チベット族）がチベット自治区党委員会書記（複数の書記の一人）に選出された⁴⁸。パサンは1937年あるいは1940年生まれといわれ、いずれにせよ当時30代前半であった。若い少数民族の女性の登用という点では、前述のパオレジタイと共通するところがある。パサンはその後長期にわたりチベット自治区党委員会書記、また副書記、中央委員等の地位にあり、1998年から2003年まで全国婦女聯合會副主席を務めたことで知られる⁴⁹。

チベット自治区上層部において新たに抜擢された少数民族エリー

⁴⁵ 同上、頁251・689。略歴に関しては、張聲作編、前掲書、頁267。蕭淮蘇編、前掲書、頁302。

⁴⁶ 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁627。

⁴⁷ 同上、頁743・745。

⁴⁸ 中國共產黨西藏自治區組織部他編、前掲書、頁154。

⁴⁹ パサンの略歴に関しては「中共政治菁英資料庫 巴桑」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1140016>。張聲作編、前掲書、頁56。生年について前者は1937年、後者は1940年としている。

トの例として、ライディ(熱地)(チベット族)も挙げられる。ライディは1938年生まれとされ⁵⁰、1975年3月にチベット自治区党委員会書記(複数の書記の一人)に就いた当時、30代後半であった⁵¹。世代としてはパサン、パオレジタイらとほぼ同じで、文革後長期にわたりチベット自治区党委員会書記、また副書記等の地位にあった点もパサンと共通する。ライディは後年、第十二期、十三期中央委員となったことでも知られ、昇進を続けた。

同時期の他の少数民族自治区上層部においても、パサン、ライディらと同様に新しい少数民族エリートが陸続と登場した。寧夏回族自治区には、1971年8月の寧夏回族自治区党委員会再建時に、趙志強という回族女性が寧夏回族自治区党委員会副書記(複数人の一人)に任命された⁵²。その他の新しい回族エリートの例として、1971年8月に寧夏回族自治区党委員会常務委員に選出された馬思忠(回族)が挙げられる。馬思忠は、文革後も寧夏回族自治区人民政府副主席、寧夏回族自治区人民代表大會常務委員会主任等として上層部に地位を維持した⁵³。広西チワン族自治区においても、梁吉泉と杜易⁵⁴(いずれもチワン族)という新しい少数民族エリートが、1973年8月に広西チワン族自治区党委員会常務委員に就任した⁵⁵。梁吉泉は1944

⁵⁰ ライディの生年、略歴に関しては、以下参照。張聲作編、前掲書、頁260。

⁵¹ 中國共產黨西藏自治區組織部他編、前掲書、頁154。

⁵² 中國共產黨寧夏回族自治区組織部他編、前掲書、頁180。

⁵³ 同上、頁181・403・412。略歴に関しては「中共政治菁英資料庫 馬思忠」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141386>。張聲作編、前掲書、頁20。

⁵⁴ 杜易の生年、略歴に関しては、以下参照。張聲作編、前掲書、頁124。

⁵⁵ 中國共產黨廣西壯族自治區組織部他編、前掲書、頁524。なお、梁吉泉は1980年まで広西チワン族自治区党委員会常務委員の地位にあり、杜易は1975年10月に書記に就任した後、81年までその地位にあった(中國共產黨廣西壯族自治區組織部他編、前掲書、頁524・633・634・637)。

年生まれとされ、就任当時 20 代であった⁵⁶。少数民族自治区ではないが、雲南省では、前述のチリンワンダンが 1973 年 10 月に迪慶チベット族自治州党委第一書記に就任した⁵⁷。

このように全国の少数民族自治区、自治州において少数民族が党組織の上層部に扶植される傾向が見られたが、中でもこの時期に多くの新しい少数民族エリートを輩出した少数民族自治区は新疆ウイグル自治区であろう。1971 年 5 月の新疆ウイグル自治区第二期党委委員会発足時に、イジャハン（依加汗）（カザフ族）、田淑珍（回族、女性）、イスマイル・エメトゥ（司馬義・艾買提）（ウイグル族）らが常務委員に選出され、彼ら全員とも文革期を通じて常務委員を務めた⁵⁸。このうち田淑珍は、新疆ウイグル自治区党委委員会常務委員会の歴史において初の女性常務委員であり、また初の回族常務委員でもあった。しかも彼女は 1942 年生まれと言われ⁵⁹、71 年 5 月当時、30 歳に満たなかった。

イスマイル・エメトゥもまた 1935 年生まれの比較的若い政治エリートで、彼の起用も「吐古納新」が重視された当時の傾向を反映した人事であったと見られる⁶⁰。しかし彼は文革前の 1965 年 12 月に新疆ウイグル自治区党委委員会文教政治部副主任に就任しており⁶¹、既にかんがりの高位に就いていたことから、文革の勃発後に基層幹部から抜擢されたとは言い難い。とはいえ、文革期に失脚を免れ、1968 年

⁵⁶ 略歴に関しては「中共政治菁英資料庫 梁吉泉」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1142215>。

⁵⁷ 雲南省地方志編纂委員会他編『雲南省志 卷四十三 中共雲南省委志』（昆明：雲南人民出版社、2000 年）、頁 329。

⁵⁸ 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁 241～242・389。

⁵⁹ 同上、頁 246。

⁶⁰ 略歴に関しては、張聲作編、前掲書、頁 80。

⁶¹ 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書、頁 119。

9月に新疆ウイグル自治区革命委員会常務委員⁶²、1971年5月に新疆ウイグル自治区党委員会常務委員となり、前述のセイフディンの第一書記就任に前後して、新疆ウイグル自治区党委員会組織部長に就任し、かつ新疆ウイグル自治区革命委員会副主任を兼任することとなった⁶³。その後1979年に新疆ウイグル自治区人民政府主席に就任し、第十期から第十六期まで連続して中央委員に選出され、1986年から1998年まで国家民族事務委員会主任を務め、新疆を代表する少数民族エリートとなった。

最後に、1974年11月に新疆ウイグル自治区党委員会常務委員、革命委員会副主任(複数人の一人)に就任したジャナブル(賈那布爾)(カザフ族)の事例も看過できないだろう⁶⁴。ジャナブルは、1934年生まれで、基層幹部として文革を迎えた。ジャナブルの興味深い点は、文革中、五七幹部学校に送られたが、復活し、1972年12月にアルタイ地区党委員会副書記に任命されたという点である⁶⁵。文革後も、新疆ウイグル自治区人民政府副主席、政治協商会議主席等として、新疆ウイグル自治区上層部に存在し続けた。

これらの新たに少数民族自治区上層部に組み込まれた少数民族エリートは、おしなべて年齢が若く、大多数はその後も長期にわたって、少数民族自治区ないし中央に存在し続けた。無論、一部には文革の終焉後、失脚あるいは死亡した人物もいる。しかし、上記の少数民族エリートの大部分は、その後も長く上層部に定着し、現在もなお存命である。既に老齢となり第一線から退いているとは言え、

⁶² 同上、頁680。

⁶³ 同上、頁252・680。

⁶⁴ 同上、頁242・680。

⁶⁵ 略歴に関しては「中共政治菁英資料庫 賈那布爾」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1138829>。張声作編、前掲書、頁265。蕭淮蘇編、前掲書、頁296。

隠然たる勢力を有していると考えられる。彼らが文革後の少数民族地域の政治において果たした役割に関しては、今後検討に値するだろう。

四 おわりに

以上の考察から、第九回党大会以降の中央委員会及び1970年代前半の少数民族自治区上層部に、新しい少数民族エリートが登場したことがわかる。彼らは文革の過程で淘汰された旧来の政治エリートに比べ、まさに文革によって恩恵を受けた側であったと言えよう。また彼らは起用された当時、おしなべて若かったため、その多くは文革後も比較的長期にわたり少数民族自治区上層部に在職し続けることになった。本稿が扱った中で言えば、チベット自治区のパサン、ライディ、新疆ウイグル自治区のイスマイル・エメトゥ、ティムール・ダワメティ、ジャナブル等がその好例である。

少数民族地域における文革の問題を考える上で、たしかに「破壊」の面は重要である。筆者はこの点を否定するものではない。しかし、「破壊」と時を同じくして何らかの変化が進行したこともまた、文革の一面として重要であると考え。一連の政治運動の中心に在った毛沢東の「最高指示」によれば、「吐故納新」と形容された幹部の入れ替えが、政策理念として明確に存在していた。すると、「破壊」が「破壊」のみを目的とするのではなく、老廃物と見なされた旧来の政治エリートの処分後に、毛沢東にとって利用価値の高い新しい政治エリートを「創造」することが真の目的であったと見られる。そうであるならば、たしかに文革の「破壊」の面が文革後の中国に重大な後遺症を残した面があることは否めないが、他方で「破壊」の後に続いた「創造」の行為が、結果として少数民族出身であり、なおかつ共産主義の精神を持った少数民族エリートを創出し、文革

後の中国に別の意味で重大な影響を与えることとなった点も興味深い現象であろう。

本稿の主眼は、以上のような文革期の少数民族エリートの起用に関する事実関係の検証にあり、その意味ではファクト・ファインディングの論文とも評されよう。しかし、この問題は今日の民族問題にも影を落としていると言っても過言ではない。星野も述べているように、「確かに文革は『歴史決議』によって徹底的に否定されているが、文革中に作り上げられた制度や慣習が改革開放時代になってもいわば文革の遺産として定着しているケースがあることに注意しなければならない」⁶⁶。筆者もこの考えに賛成である。更に付け加えて言うならば、「制度や慣習」だけでなく、人、すなわち新しい少数民族エリートが文革期に形成された点も見逃してはならない。本稿の考察によれば、過去の多くの研究が看過してきた文革の一面として、文革期に少数民族エリートが「新鮮な血液」として少数民族自治区ないし中央の上層部に登用された点が重要である。文革期に多くの旧来の少数民族エリートが打倒されたが、それと時を同じくして中共体制に親和的な新しい少数民族エリートが登場し、彼らが文革後長期にわたり上層部に定着したことも、文革の遺産として捉えられよう。

(寄稿：2016年6月25日、再審：2017年2月10日、採用：2017年4月5日)

⁶⁶ 星野昌裕「内モンゴルの文化大革命とその現代的意味」国分良成編『中国文化大革命再論』(慶應義塾大学出版会、2003年)、342ページ。

文化大革命期間的新少數民族菁英研究

熊倉潤

(日本貿易振興機構〈JETRO〉亞洲經濟研究所研究員)

【摘要】

從文化大革命（1966-76 年）爆發迄今，已經超過 50 年。一般而言，過去的研究大多將文革時期視為是民族工作全面被「破壞」之時期。然而，從本文的案例分析中，能夠觀察到中國共產黨（以下稱為「中共」）在重建黨組織之際，少數民族自治區的高層也出現了新的少數民族菁英。此與 1969 年中共第九次黨大會以後，基於提倡「吐故納新」的政策理念，進而將新的政治菁英拔擢至高層之背景有關。文革時期獲得重用、親中共體制的新少數民族菁英，於文革後也長期的、持續成為高層的政治勢力。（「菁英」在此的定義是指，少數民族自治區黨委員會常務委員層級以上的人。）

關鍵字：文化大革命、少數民族菁英、內蒙古、新疆、毛澤東

The Emergence of New Ethnic-Minority Elites During the Cultural Revolution (1966-76)

Jun Kumakura

Institute of Developing Economies (JETRO) Research Fellow

[Abstract]

2016 marked the 50th anniversary of the beginning of the Cultural Revolution (1966-76). Many researchers regard the period as an era defined by the wholesale destruction of China's ethnic project. However, this article argues that, with the reconstruction of the Chinese Communist Party apparatus in 1971, new ethnic-minority elites emerged at the highest levels of each ethnic-minority autonomous region. The promotion of these ethnic-minority elites is related to the policy ideal of “blow out the old air and breathe in the fresh air” (吐故納新) under which new young cadres were recruited after the 9th Party Congress of the CCP in 1969. Most of the ethnic-minority elites appointed as high-ranking officials in this period have survived and gained a kind of vested interest until now.

Keywords: Cultural Revolution, Ethnic-Minority Elites, Inner Mongolia, Xinjiang, Mao Tse-tung

〈参考文献〉

- 天兒慧他編『岩波現代中国事典』（岩波書店、1999年）。
- (Amako, Satoshi, et al. [eds.], *Iwanami Gendai China Encyclopedia*, Iwanami Shoten, 1999.)
- 熊倉潤「民族自決と民族団結——少数民族地域における政治エリート集団の形成過程に関する中ソ比較研究」東京大学大学院法学政治学研究科博士論文（2015年）。
- (Kumakura, Jun, “Ethnic Self-Determination and Unity: Sino-Soviet Comparative Research Into The Formation of Political Elite Groups in Ethnic Minority Areas” Tokyo University Graduate School of Political Science Research Doctorate Thesis, 2015.)
- 国分良成・星野昌裕「中国共産党の民族政策」可児弘明他編『民族で読む中国』（朝日選書、1998年）。
- (Kokubun, Ryosei, and Hoshino, Masahiro, “The Chinese Communist Party’s Ethnic Minority Policy,” Hiroaki, Kani, et al. [eds.], *Reading China Through Ethnicity*, Asahi Anthology, 1998.)
- 塩川伸明『ソ連とは何だったか』（勁草書房、1994年）。
- (Shiokawa, Nobuaki, *What Was the Soviet Union?*, Keiso Books, 1994.)
- 東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第一巻（東方書店、1970年）。
- (Toho Books Press [eds.], *Collection of Materials on China’s Proletariat Cultural Revolution*, Vol. 1, Toho Shoten, 1970.)
- 内閣調査室編『中共人民内部の矛盾と整風運動』（大蔵省印刷局、1957年）。
- (Cabinet Research Office [eds.], *China’s Domestic Controversies and Rectification Movements*, Ministry of Finance Printing Press, 1957.)
- 星野昌裕「内モンゴルの文化大革命とその現代的意味」国分良成編『中国文化大革命再論』（慶應義塾大学出版会、2003年）。
- (Hoshino, Masahiro, “Inner Mongolia’s Cultural Revolution and What it Means Today,” Kokubun, Ryosei [ed.], *Re-Examining China’s Cultural Revolution*, Keio University Press, 2003.)
- 毛里和子『周縁からの中国——民族問題と国家』（東京大学出版会、1998年）。
- (Mori, Kazuko, *China from the Peripheries: Issues of Race and Nation*, Tokyo University Press, 1998.)
- 楊海英『墓標なき草原』（岩波書店、2009年）。
- (Yang, Haiying, *The Grassland Without Tombstones*, Iwanami Shoten, 2009.)
- 「中共政治菁英資料庫 七林旺丹」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141340>。
- (“Database on Chinese Communist Party Elites: Qilin Wangdan,” National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1141340>.)
- 「中共政治菁英資料庫 巴桑」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1140016>。
- (“Database on Chinese Communist Party Elites: Ba Sang,” National Chengchi University,

- <http://cped.nccu.edu.tw/node/1140016>.)
「中共政治菁英資料庫 央宗」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141586>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Yang Zong," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1141586>.)
「中共政治菁英資料庫 肉孜·吐爾迪」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1143497>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Rouzi Tuerdi," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1143497>.)
「中共政治菁英資料庫 阿木冬·尼牙孜」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1144683>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Amudong Niyazi," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1144683>.)
「中共政治菁英資料庫 馬思忠」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141386>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Ma Sizhong," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1141386>.)
「中共政治菁英資料庫 梁吉泉」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1142215>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Liang Jiquan," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1142215>.)
「中共政治菁英資料庫 賈那布爾」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1138829>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Jiana Bu'er," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1138829>.)
「中共政治菁英資料庫 寶日勒岱」國立政治大學、<http://cped.nccu.edu.tw/node/1141313>。
("Database on Chinese Communist Party Elites: Baori Ledai," National Chengchi University, <http://cped.nccu.edu.tw/node/1141313>.)
「吸收無產階級的新鮮血液——整黨工作中的一個重要問題」『紅旗』(北京)、1968年、第4期、1968年10月、頁5~12。
("Absorbing the Fresh Blood of the Proletariat Classes: An Important Issue for the Entire Party," *Red Flag*, Beijing, 1968, Vol. 4 [October 1968], pp. 5-12.)
「最高指示」『紅旗』(北京)1968年第4期、1968年10月、頁2。
("Highest Directions" *Red Flag*, Beijing, 1968, Vol. 4 [October 1968], p. 2.)
『廣西日報』(南寧)1971年11月3日、第2版。
(*Guangxi Daily*, Nanning, 3 November 1971, 2nd ed.)
七林旺丹「毛主席的光輝千秋萬代照雪山」『紅旗』(北京)、1970年、第1期、1970年1月、頁37~39。
(Qilin, Wangdan, "Chairman Mao Zedong's Brilliance Shines Across the Snowy Education" *Red Flag*, Beijing, 1970, Vol. 1 [January 1970], pp. 37-39.)
中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』

(北京：中共黨史出版社、1996 年)。

(Chinese Communist Party Uighur Autonomous Region Secretariat Organisation Department, et al. [eds.], *History of the Chinese Communist Party Uighur Autonomous Region Organisation*, Beijing: Chinese Communist Party Press, 1996.)

中國共產黨內蒙古自治區組織部他編『中國共產黨內蒙古自治區自治區組織史資料』(呼和浩特：內蒙古人民出版社、1995 年)。

(Chinese Communist Party Inner Mongolia Autonomous Region Organisation Department, et al. [eds.], *History of the Chinese Communist Party Inner Mongolia Autonomous Region Organisation* (Hohhot, Inner Mongolia People's Press, 1995.)

中國共產黨廣西壯族自治區組織部他編『中國共產黨廣西壯族自治區組織史資料』(南寧：廣西人民出版社、1995 年)。

(Chinese Communist Party Guangxi Zhuang Autonomous Region Organisation Department, et al. [eds.], *Chinese Communist Party Zhuang Autonomous region Organisation History*, Nanning: Guangxi People's Press, 1995.)

中國共產黨西藏自治區組織部他編『中國共產黨西藏自治區組織史資料』(拉薩：西藏人民出版社、1993 年)。

(Chinese Communist Party Tibetan Autonomous Region Organisation Department, et al. [eds.], *History of the Chinese Communist Party Tibetan Autonomous Region Organisation*, Lhasa: Tibetan People's Press, 1993.)

中國共產黨寧夏回族自治區組織部他編『中國共產黨寧夏回族自治區組織史資料』(銀川：寧夏人民出版社、1992 年)。

(Chinese Communist Party Ningxia Hui Autonomous Region Organisation Department, et al. [eds.], *Chinese Communist Party Ningxia Hui Autonomous Region Organisation History*, Yinchuan: Ningxia People's Press, 1992.)

中國共產黨麗江地區委員會「積極培養少數民族幹部」『紅旗』(1973 年 3 月)、頁 16~19。

(Chinese Communist Party Lijiang Region Committee, "Positively Cultivate Minority Ethnicity Cadres," *Red Flag*, March 1973, pp. 16-19.)

央宗「毛澤東思想的光輝照亮了西藏高原」『紅旗』(北京)、1969 年、第 10 期、1969 年 9 月、頁 69~72。

(Yang Zong, "The Brilliance of Mao Zedong Thought Radiates Across the Tibetan Plains," *Red Flag*, Beijing, 1969, Vol. 10 [September 1969], pp. 69-72.)

肉孜吐爾迪·孜牙「加強團結、粉碎帝、修、反的陰謀」『紅旗』(北京)、1969 年、第 6·7 期、1969 年 7 月、頁 15~17。

(Rouzi Tuerdi, Ziya, "Strengthening Unity, Breaking Down Imperial, Intellectual and Anti-Revolutionary Plots," *Red Flag*, Beijing, 1969, Vol. 6, 7 [July 1969], pp. 15-17.)

宋永毅『文革機密檔案：廣西報告』(美國紐約市：明鏡出版社、2014 年)。

- (Song, Yongyi, *Cultural Revolution Confidential Archives: Guangxi Reports*, New York City: Mirror Books, 2014.)
- 林彪「在中國共產黨第九次全國代表大會上的報告」『紅旗』(北京)、1969年第5期、1969年5月、頁7~33。
- (Lin, Biao, "Reports from The Ninth National Representative Congress of the Chinese Communist Party," *Red Flag*, Beijing, 1969, Vol. 5 [May 1969], pp. 7-33.)
- 金炳鎬『新中國民族政策60年』(北京:中央民族大學出版社、2009年)。
- (Jin, Binghao, *Sixty Years of the New Chinese Racial Policy*, Beijing: Minzu University of China Press, 2009.)
- 陳壯彭「一年來中共的『少數民族』工作」『中共研究』第4卷、第1期(1970年1月)、頁88~100。
- (Chen, Zhuangpeng, "A Year of the Chinese Communist Party's Minority Ethnicity Work," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 4, No. 1 [January 1970], pp. 88-100.)
- 陳壯彭「一年來中共的『少數民族』工作」『中共研究』第5卷、第2期(1971年2月)、頁89~104。
- (Chen, Zhuangpeng, "A Year of the Chinese Communist Party's Minority Ethnicity Work," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 5, No. 2 [February 1971], pp. 89-104.)
- 國相「中共對少數民族幹部的培養與利用」『中共研究』第6卷、第6期(1972年6月)、頁77~85。
- (Guo Xiang, "The Chinese Communist Party's Cultivation and Deployment of Minority Ethnicity Cadres," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 6, No. 6 [June 1972], pp. 77-85.)
- 張聲作編『當代中國少數民族名人錄』(北京:華文出版社、1992年)。
- (Zhang, Shengzuo [ed.], *Famous Ethnic Minority People of Modern China*, Beijing: Huawen Press, 1992.)
- 黃光學編『當代中國的民族工作』(北京:當代中國出版社、1993年)。
- (Huang, Guangxue [ed.], *Modern China's Ethnicity Project*, Beijing: Modern China Press, 1993.)
- 雲南省地方志編纂委員會他編『雲南省志 卷四十三 中共雲南省委志』(昆明:雲南人民出版社、2000年)。
- (Yunnan Provincial Local Records Committee, et al. [eds.], *Yunnan Provincial Records, Roll 43, Chinese Communist Party Yunnan Province Committee Records*, Kunming: Yunnan People's Press, 2000.)
- 楊文欽「一九七四年的中共少數民族工作」『中共研究』第9卷、第1期(1975年1月)、頁96~103。
- (Yang, Wenqin, "The Chinese Communist Party's Ethnic Minority Work in 1974," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 9, No. 1 [January 1975], pp. 96-103.)
- 趙洪慈「一年來中共的『少數民族』工作」『中共研究』第6卷、第3期(1972年3月)、

頁 48~68。

(Qiao, Hongci, "A Year of the Chinese Communist Party's Minority Ethnicity Work," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 6, No. 3 [March 1972], pp. 48-68.)

趙洪慈「一九七二年的中共少數民族工作」『中共研究』第 7 卷、第 1 期（1973 年 1 月）、頁 64~76。

(Qiao, Hongci, "A Year of the Chinese Communist Party's Minority Ethnicity Work," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 7, No. 1 [January 1973], pp. 64-76.)

趙洪慈「中共少數民族幹部政策研究（上）」『中共研究』第 8 卷、第 9 期（1974 年 9 月）、頁 44~67。

(Qiao, Hongci, "Chinese Communist Party Ethnic Minority Cadre Policy Research I," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 8, No. 9 [September 1974], pp. 44-67.)

趙洪慈「中共少數民族幹部政策研究（中）」『中共研究』第 8 卷、第 10 期（1974 年 10 月）、頁 85~102。

(Qiao, Hongci, "Chinese Communist Party Ethnic Minority Cadre Policy Research II," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 8, No. 10 [October 1974], pp. 85-102.)

趙洪慈「中共少數民族幹部政策研究（下）」『中共研究』第 8 卷、第 11 期（1974 年 11 月）、頁 77~92。

(Qiao, Hongci, "Chinese Communist Party Ethnic Minority Cadre Policy Research III," *Chinese Communist Party Research*, Vol. 8, No. 11 [November 1974], pp. 77-92.)

趙洪慈『中共政權少數民族政策』（台北：中國文化學院大陸問題研究所、1976 年）。

(Qiao, Hongci, *Ethnic Minority Policy of the Chinese Communist Party Regime*, Taipei: Chinese Culture Academy Mainland Affairs Research Institute, 1976.)

蕭淮蘇編『歷屆中共中央委員人名詞典 1921-1987』（北京：中共黨史出版社、1992 年）。

(Xiao, Huaisu [ed.], *Dictionary of the Historical Members of the Chinese Communist Party Central Committee: 1921-1987*, Beijing: Chinese Communist Party History Press, 1992.)

寶日勒岱「把千里草原建設成祖國的鋼鐵長城」『紅旗』（北京）1970 年、第 5 期、1970 年 5 月、頁 74~76。

(Baori Ledai, "Turn the Boundless Grasslands into the Iron Great Wall of the Fatherland," *Red Flag*, Beijing: 1970, Vol. 5 [May 1970], pp. 74-76.)